日本との出会い 30 年

楊　際開

1985 年 1 月 15 日、成田空港に降り立った私にとって、初めて目にした日本の印象は、成人式を迎える着物姿の娘たちでした。27 歳の誕生日を迎えたばかりでした。

研究経歴

来日した私は、学習院大学の修士課程で、中国の反満革命家である章炳麟（号・章太炎）の思想の研究を始め、その後、東京大学の平野健一郎先生の下で、博士課程を修了しました。修士課程の時に手にした島田虔次の『中国革命の先駆者たち』（筑摩書房、1965 年）から、章太炎と同時代の人である温州籍変法家宋恕の存在を知ったことが研究のきっかけでした。

1990 年の温州への調査の際に、いまは亡き胡珠生先生から宋恕・陳虬・陳黻宸という近代温州の三傑について伺う機会がありました。この三傑を通じて章太炎を理解する新たな視点が得られるのではないかと思い、温州への調査で手に入れた陳虬の資料に基づき、陳虬研究でファイナル・コロキアムまで進みました。平野先生からは、陳虬は一流の思想家ではないと言われたのですが、私にとっては学術研究への道に入る端緒として、とてもいい訓練となりました。

1994 年 11 月 21 日に帰国し、最初に発表した学術論文は「章炳麟はなぜ『反満』をしなければならなかったのか」（『二十一世紀』香港中文大学、1998 年 4 月号）でした。19 世紀末の東アジアの国際関係から章炳麟の反満思想に新たな照明を当てることは、今までの通説と異なっていましたが、その時から、彼の政治思想が近代温州の三傑と絡んでいることに気がついていました。前出の宋恕は、李鴻章に見込まれて、章炳麟・譚嗣同・梁啓超等とも親交があった、清末の著名な改革派の思想家です。帰国する前に、1993 年に出版された『宋恕集』を購入してはいましたが、本格的な研究は 1998 年からだったと思います。2006 年に宋恕研究の成果を書物にし、原稿を 3 回改め、2010 年に『清末変法と日本―宋恕の政治思想を中心に』と題して上海古籍出版社から出版しました。

私の勤めている杭州師範大学では、2011 年に国学院が創設されました。私は国学院の専任研究員になり、兪樾や章炳麟ら、杭州ゆかりの清末の思想家の研究を再開しました。その成果として書いた論文には「宋恕と譚嗣同―『仁学』を中心に」（『杭州師範大学学報』、2014 年第 2 期）、「章太炎と辛亥革命―清代学術史の政治的ジレンマを手掛かりに」（『政治思想史』天津師範大学、2015 年第 3 期）と、「章太炎の東アジア連邦構想」（『東アジア文化交渉研究』関西大学文化交渉学教育研究拠点、2015 年第 8 号）等があります。伊東貴之教授の『思想としての近世中国』（東京大学出版会、2005 年）を中国語に翻訳したことが縁で、2013 年 1 月から台湾大学に一カ月滞在させていただきました。そこで、章太炎の東アジア連邦構想への理解を深め、また、政治大学法学部の陳恵馨女史との出会いで、宋恕の改革思想を理解する法制史的なヒントを得ることができました。2014 年 1 月、マカオ大学歴史学部が主催した東方外交の国際シンポジウムに参加した時に提出した論文「中華世界秩序の近代的変貌―魏源の海防思想の形成と伝播を中心に」は、魏源海防思想の意義を再考するものです。

2014 年 3 月 1 日からは、世界の日本研究交流の拠点である国際日本文化研究センター（日文研）に外国人研究員として 1 年間滞在することになりました。この滞在中、日本との出会いからの歴史をもう一度自分の中で整理する機会に恵まれました。例えば、京都大学の寺田浩明教授との対話を通じて執筆した「近代中国の思想と革命研究覚書―日本からの思想的な要因を中心に」が、日文研発行の学術誌『日本研究』第 51 集（2015 年 3 月）に掲載されました。日文研外国人研究員への申請課題である「東アジアという視野における徂徠学とその意義―辛亥革命の思想史的意義を手掛かりとして」も既に完成しています。

日文研では、伊東貴之教授主宰の「『心身／身心』と『環境』の哲学―東アジアの伝統的概念の再検討とその普遍化の試み」と題する共同研究会で発表した「吉田松陰の革命思想とその天下観―東アジアの社会動員という視点から」が同氏編著の論文集（汲古書院、2016 年）に収録されました。特任助教の宮崎康子女史のバタイユ研究に導かれて出会ったＪ＝Ｌ・ナンシー『無為の共同体―哲学を問い直す分有の思考』（西谷修・安原伸一訳、以文社、2001 年）から、西洋流のいわゆる国民国家の思考枠を突き破るような発想法に感銘を受け、また、小松和彦所長の民俗学研究との出会いにより、古代日本史への理解に重要な視点を得ることができました。さらに、副所長でもある井上章一教授の『日

本には古代があったのか』（角川選書、2008 年）との出会いもまた、私のこの感銘を新たにしてくれました。

将来の方向

この間、博士課程の指導教官だった平野先生のご研究は、エスニシティー論から、近代国家を相対化させ、アジアにおける「文化の共通性」の問題に至っており、私の唱える「文明の共同性」というテーマと問題圏を共有しています。異なる点は、平野先生の言われる「文化」は国民国家という前提に立っていますが、私はむしろ、文化ではなく、「文明」としての共通性を考えています。つまり、東アジア世界における新たな人の国際移動は、文化の共通性ではなく、文明的絆というようなものを実感させるものであり、それゆえ、文明の共同性への復権を要求し、今まで一つのパラダイムと思われた近代国家の辺境をなし崩し的に文明レベルで再構築していくものではないか、と考える点にあります。したがって、東アジアにおいては、西洋流の国民国家にビルド・インされた物差しから離れて、如何にして自分たちの文明的な共同性への回帰を果たすべきかが問題になるでしょう。

文明の共同性への復権は、国民国家へのアイデンティティーから、山や川への帰属意識の復権を通じて達成されるものです。そのため、「山と川を主とすべき」と主張する魏源や、魏源のこの主張を自分の中に受け止めた吉田松陰の思想的原点に立ち返って再出発しなければなりません。私は、内藤湖南を吉田松陰の思想と精神の後継者だと考えており、井上章一教授主催の共同研究会「人文諸学の科学史的研究」で、「内藤湖南の中国観の形成と清末変法運動」と題した報告をし、以下の問題を提起しました。

内藤の政治思想は章炳麟に呼応する
内藤の平民史観は『碧巌録』に由来する
内藤の社会史観は章学誠に基づく
内藤は近代国家の価値基盤を東アジア文化史に置く
内藤は東洋の多元的地域文化による連邦制を提議する
内藤から見れば、日本文化は東アジア連邦制を造る要にある
内藤は吉田松陰の魏源理解を受け継ぐ

内藤は朴学における清朝自由主義の伝統に立脚する

これら八つの視点を、今までの私の近代中国の思想と革命についての研究の中に組み入れながら、東アジアの文明触変史観を再構築することが、これからの研究課題となります。現在は、博士号の申請も兼ねて、これまで中国語で書いた諸論文を日本語に訳し直し、『中国革命の起源』として、日本語での出版を目指しています。執筆中の宋恕伝『宋恕とその時代』も日本語に訳し、日本語での出版を考えています。

また、「近代日本のアジア思想と近代中国思想の中の日本的な要素」という研究テーマについても、東アジアにおける文明安全およびその文明外交、文明触変という視角から考えていくつもりです。

日文研に滞在した1年、萩や博多、長崎、それから弘前等へ旅行し、見聞を広めました。また、二人の子供が暮らす札幌を訪問する際に目にした北海道の山と川など、日本の山河の美しさに感動しました。

日本との出会いからすでに30年、私の生命も日本と一体となっており、東アジア世界の存在を実感しております。早稲田大学の劉傑教授の言うように、「経済的な空間としての東アジアが一応その姿を現している現在、重要なのは文化空間としての東アジアである」（西川潤・平野健一郎編『国際移動と社会変容』岩波書店、2007年、69頁）と強く感じています。この「文化空間としての東アジア」とは、内藤湖南がかつて『新支那論』の中で述べた「東洋文化の発展は国民の区別を無視」しているということと同じレベルで捉えるべきだと考えます。なぜなら、内藤のいう「東洋文化」の中身は東洋諸国に共通の「文明」を指すもので、一国中心主義的な「文化」ではないからです。したがって、東アジアにおける共同性を考察するためには、近代国家アイデンティティーから東アジア文明アイデンティティーへの転換こそ急務なのです。自分の研究の意義をここに見出しています。

東アジア文明アイデンティティーに関して、1年間の京都滞在の中でもいろいろと発見がありました。一番感動したのは、宇治の萬福寺（黄檗宗大本山）です。萬福寺を建立した隠元禅師は、明朝時代の臨済宗を代表する僧で、開寺に当たり、中国での自坊（福建省）と同じ「黄檗山萬福寺」と名づけました。黄檗宗は中国大陸での長い道程を経て長崎に入り、さらに大阪の普門寺を経て、

京都の宇治に根を下したのです。また、信貴山の飛倉の話は、杭州霊隠寺飛来峰の話と多くの共通項を持っています。

これらは、私の唱えている「文明の共同性」の表象として、東アジア世界の人々の国境を越えた文化よりも深く広い文明の共同性の歴史的・文明的絆の証左となるのではないでしょうか。国民や国家の利益とは、共通の文明的基礎の上に成り立っているものです。萬福寺の黄檗宗や信貴山の飛倉のような倫理的連帯が海を越えて、中国をはじめとする東アジア世界へ広がっていくように、京都はこれからの東アジアにおける文化的発信源として、文明規模の共同性の回復を目指すための拠点の一つとなるのではないかと期待しています。